

断耳

青遠叢書第六編

歌集  
断耳

湯本嘉秀

短歌新聞社

## 著 者 略 歴

大正3年、埼玉県北埼玉郡埼玉村大字埼玉字下埼玉  
1340番地（現行田市）生れ。日本獣医畜産専門学校  
（現日本獣医畜産大学）第2研究科卒業。湯本獣医科病  
院長、日本獣医学士、獣医師。

昭和47年「断耳」で第3回埼玉文学賞を受賞。

「青遠」同人。行田支部長。「日本歌人クラブ」会員。

著書「山羊人工授精入門」1948年、日本山羊協会発行。

埼玉県山羊協会会長。日本山羊登録協会中央審査員。

日本山羊登録協会常任理事。

本名、湯本新太郎

## 歌 集 断 耳

青遠叢書第6編

昭和51年6月1日発行

著 者 湯 本 嘉 秀

〒361 埼玉県行田市埼玉県古蹟小崎沼ノ辺  
電話 0485 (55) 4 2 0 9

発 行 者 石 黒 清 介

印 刷 所 日 本 文 芸 印 刷

製 本 所 菊 川 製 本 所

発 行 所 短 歌 新 聞 社

〒166 東京都杉並区高円寺南4-43-9  
振替口座 東京 21683 番  
電 話 (03) 312-9185

定 価 2000円

## 序

湯本嘉秀さんが始めて私を訪ねて来られたのは、昭和四十二年春もまだ浅い頃であった。その時「朝日新聞の記事に感動しました」と言われたが、それは新年のインタビュー記事のことで、「年齢のためかこの頃、郷土を詠いたい心がしきりにする」などと私は言っていたように記憶する。

湯本さんは、私の生家と同姓で弟と同年配であり、また隣家でもあったが、大正の頃は家庭のしつけも厳しく、幼女の頃から私には村内の少年達と遊ぶというような習慣はなかった。そのためか、長い年月を経て突然の来訪を受けても初対面の感じで、なつかしそうに短歌の指導を乞われても、一瞬とまどいを覚えたくらいであった。

私は差当り万葉集を読むことをすすめた。これは先師与謝野晶子の教えにかならずしも添わぬようであるが、湯本さんの家は近くに万葉の歌枕があり

前玉の小埼の沼に鴨ぞ羽きる己が尾に零り置ける霜を払ふとにあらしの旋頭歌を刻んだ石碑も建っていて、幼い頃からなじみ深いものとなっているから、入り易いと思ったのである。また実作に於ては、丁寧な写生をすることをすすめた。なまじな思考より対象が多くを語ってくれるとも言った。次に一つの対象をあらゆる方面から写して歌作することすすめた。湯本さんは私がすすめたそれらのことを予期以上克明に実行したようである。その年七月発行の「青遠」三号に「友は皆勤をもてり吾一人父祖の田を守り今日も種まく」を含む「父祖の田」の素朴な七首が載り、湯本さんの歌の出発となった。

その後、日増しに歌作に熱中して、作品が溜まると添削を受けに来ら

れるのだが、次第に歌数が増して、多作をすすめた私の方が悲鳴を上げる有様となった。客が立て込んでいる時でも、目の前で最後の一首まで筆が入らないと席を立たなかった。何物をもしりぞける熱心さであった。その気持は行田支部の拡張にも向けられ、新に多数の会員を加入させた。そのような努力が実を結び、五年目の昭和四十七年一月、作品「断耳」が、埼玉新聞の埼玉文学賞短歌部門の授賞の対象となった。

#### 断耳抄

耳断たむ子犬の足の太くして静注をする手にあまりたり

クリップに添ひて一氣に断耳せり薄刃のメスの切れ味の鋭き

生き身より切り落されて残骸となりし耳端の死せるその色

この犬の整形に取材した連作十五首は、獣医師としての職業の実感を克明に観察描写した成功であり、その特異さは新人賞にふさわしく新鮮で、選者の加藤克巳、阿部静枝、大西民子氏から「職業と動物愛の相克

を、生活の実態に即して歌い上げ、全体に力のみなぎった作品」という評価を得た。

このたび湯本さんが歌集を上梓されるに当って、入会以来発表した作品千五百余首を書き抜いて来られた。恐らく活字にならなかった作品は、その数倍に及んだと思う。その中から私は凡そ六百首を選び「断耳」を作品中最も鮮やかなものとして、歌集名にもすすめたのであった。この歌集に収めた湯本さんの作品の大方は、獣医師としての職業にかかわるものと、郷土の「風土記の丘」を詠んだものであるが、重複が多くそのままでは読み通すのに多少の煩わしさが伴うので「青春」「朱夏」「白秋」「玄冬」の四章に大別した一章ごとに、ピークを設けるように構成したので年代順ではない。湯本さんは形を整えたこの一卷によって、自己の個性を一層はつきりと自覚し、今後の進展に備えたらよいと思う。また、湯本さんの作品の特質は職業の歌であり、他に殆んど類を見ない

趣があるが、そのどぎつい生態描写に私はしばしば堪え難いものを感じた。それを和らげるのが、

○

土間の内にきよとんとしたる蛙の子迷ひ込みある夕立の後  
黄に実る大豆畑をひよこひよここといたち鼯いたちよぎりぬ雨の日の午後  
のたくまざるユーモア、また家族を詠った優しい作品であり、おびただしい古墳詠である。

幸福を呼ぶてふ土鈴、娘の土産、倦みたる時に独り鳴らせり  
魘うなされて夢に泣く妻をゆり起し共に聞きたり夜半に降る雨  
文机に向ふ寒夜の膝掛は亡母の手織の木綿の野良着  
ほろ酔ひて帰る道みち貰ひたる紙の袋に鈴虫鳴けり  
水鳥を人の魂運たまぶ霊鳥と崇めしやここに遠つ代人は  
温ぬるみたる水面みづに首を突き出でて驚くさまの土塊つちくれの鳥



来む春に甦らん力蓄へて古代蓮は冬眠の姿に入れり

朝な夕な見つつ親しき磨墓山古墳は吾に生きゆく力を与ふ

### 近詠の

籠りゐる部屋に陽の射す午後三時掌に受けてをり陽はあたたかし  
の一首に、ひたすら写生にはげんだ八年間の努力が、ここまで到達し  
たことを私は深く喜び、この郷土の歌人の土の匂いの濃い作品が、多く  
の読者の理解と共感を得ることを心から願っている。

昭和五十年八月

濱　　梨　花　枝

# 断耳 目次

## 第一章 青春

埴輪の水鳥

佐吉<sup>さきたま</sup>多<sup>た</sup>万<sup>ま</sup>の津

浦島草

前玉<sup>さき</sup>神社

山羊

ふたりしづか

翡翠の勾玉

八幡山古墳

銅印

七

三

三

三

三

四

四

四

五

|        |     |        |    |
|--------|-----|--------|----|
| 夏祭り    | 二〇六 | 復元工房   | 七九 |
| 畢丸を食む  | 二〇二 | 断耳     | 七〇 |
| 小針沼    | 一九九 | 懽      | 七三 |
| 獣医師の日々 | 一九三 | 卒業式    | 六五 |
|        |     | 日露記念碑  | 六〇 |
|        |     | 暮鳴く    | 五三 |
|        |     | 人工授精   | 五二 |
|        |     | 第二章 朱夏 |    |

古代蓮夏景

一二

稻荷山古墳発掘

一六

蟬しぐれ

二六

小綬鶏

二三

### 第三章 白秋

花嫁

一三

燈籠流し

一五

百塚

一七

ブロイラー

一五

獣けものらと

一五

乳母車

一五

冬眠の蛙

一七

#### 第四章 玄冬

鷹墓山古墳

一五

田舎教師展

一八

交通事故

一七

梟鳴くも

一三

自由業

一九

屠殺場

二三

猫の頭骨

二五

安楽死

二〇

死ぬ

二七

古代蓮冬景

三三

母

三六

宮様獺

三九

埼玉山盛徳寺

三三

ハンター

三七

寒の北斗

四〇

あとがき

五九



断  
耳



